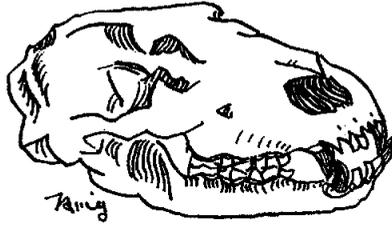


ヒグマ研究集団発足す

— その成果と課題 —



小川巖

「開拓」が「開発」に変わった北海道は、あらゆるものが大きく変わろうとしている中で、ヒグマの脅威だけは開道以来この方、ちっとも変わっていない。変わっているとすれば、かつて開拓に従事した人にとっては日常的な脅威であったものが、今日ではその脅威がとり除かれたかに見えてもひとたび森林や山に赴むけば、ヒグマの脅威が急速に甦ってくる。かつては親の話から、または体験者の話を通じてヒグマに対処する術を身につけていたに違いない。現在でも山を生活の場とする人々や、ヒグマの出没が珍しい地方の人々は本能的といえるほどにその術を心得ている。

しかし、情報化時代と謳われる今日であっても、ヒグマの習性・生態が正しく認識されないことによって、思いがけない悲劇を生ずる可能性を孕んでいる。この七月、日高山系のカムイエクタウチカウシ岳で起こった福岡大生三人のヒグマによる殺害事件は、それだけに痛ましい。ヒグマが日常生活域から遊離した存在になればなるだけ、無知から生ずる恐れを抱くか、さもなれば動物園の檻の中で愛嬌をふりまくヒグマとの同一視を招くかの、いずれかを辿ることになりがちである。いずれにしても悲劇を生む要素に満ち満ちている。

「開発」の手が奥地へ伸びきった今日、

ヒグマの生息域を圧迫しているはずなのに彼らは巧みに自己の領域を確保しているかに見える。毎年、数百頭が狩猟の対象になって捕獲されていながら、明らかな減少の徴候が今日まで見られない事実は、ヒグマの生存価の高さを如実に物語っている。

北海道を代表する大型動物は、明治以後滅亡の歴史を歩んだといっても過言ではあるまい。エゾオオカミは明治年間ですでに途絶え、エゾシカは手厚い保護の下に、ようやく回復の勢いを見せるようになった。タンチョウ・クマガラも保護なしには今日まで生き延びることは、おぼつかなかったに違いない。それにもかかわらず、一人ヒグマだけは累々とした死骸を人間の前にさらけ出し、「猛獣」として絶滅を企てられながらも、多くの場合、生物の最大の脅威になり得る人間による自然開発に耐えながら、自然を征服したと満ちする人間をおびやかすだけの「数」と「力」を保存しつつけてこられたのは、一体何によるのだろうか——夜行性・非集団性、あるいは雑食性などがその要因としてあげられている。まさにもつともである。

以上の一つ一つが重要な要因になり得ることは理解できても、現代科学のマナイタの上に乗せて料明しようとする営力は、残念ながら日本にはほとんど育たなかったと

いってよい。あるのは猟師の経験と勘に負うところの多い「聞き込み」の集積の域を越えないといってもよく、アメリカ・カナダ・ソビエトに見られる組織的な研究に大きな遅れをとっている事実は、外国文献を参照すれば一目瞭然である。

ヒグマをふくめた大型哺乳類の調査研究が、日本ではひどく立ち遅れている原因は複雑である。ヒグマについて述べれば、まず、なんといってもホームレンジ(行動圏)がきわめて広大であること。アメリカグマの平均行動距離は夏で約五キロメートル、秋で十キロメートルはあるとされており、元いた場所までの数十キロを戻った例さえあったという。したがってこれだけのホームレンジをもつタマを調査するとなると、多数の人員が必要となり、これに伴って相当額の経費を覚悟しなければならぬ。加えてヒグマの生息域は通常森林深くか、さもなれば山岳地帯であることから、条件の悪いフィールドで長期間の調査に耐えられるだけの体力(若さ)も当然のことながら必要とされる。

さらに協力体制の問題がからんでくる。これには研究者相互の協力体制と、研究者と外部をつなぐ協力体制の二つがある。一人では行ない得ない調査を、複数の研究者が結集してあげることのできる成果は偉大

である。ニホンザルを世界の冠たるものまで高めたのは、京大霊長類研究グループの当時、若手の研究者集団の力であったことは余りに有名である。研究者各自の問題意識と、それを総合するチームワークに支えられた共同研究が、必要不可欠であるゆえである。最近にいたってカモシカ・ツキノワグマを対象とした共同研究が、新たな方法をひっつけて開始された。

一方、数を頼みに相互依存に落ち入る危険性がつねにつきまとうのも、共同研究の隘路である。十人からなる研究者集団があるうとも、実質は数人分の仕事しか成していないことも往々にして起こり得る。

対外的な協力度体制についてはどうか。もとより動物を対象に野外で調査を進める以上、ハンター・営林署・猟政関係者などの密接な連繋が不可欠となってくるのは当然である。アメリカなどの場合、研究者が必要とする頭骨・胃袋、あるいは糞・卵巣さえ大量に集められるのは、ハンター・猟政関係者の絶大なバックアップによるところがきわめて大きい。日本とは比較にならないだけのデータの集積がみられ、クマの動向が正確に促えられているのは、こういった対外的な協力度体制に負うところが大きい。被害が出るたびに「対策」に狂奔する役所はあっても、平生からの地道な研究

をバックアップする度量に乏しいわが国の現状からは、正しい「対策」の立とうはずがない。

§

前置きが長くなり過ぎたようだ。金こそないが、バイタリティーだけは誰にも負けないと自負する十二人の男が集まって「北大ヒグマ研究グループ」を結成したのは五月のこと。大学院生が四名、学部学生が八名という構成で、所属も農学部をはじめとして、理学部・水産学部・工学部にまたがっている。これまでのヒグマ研究に検討を加えていく過程で、一つには生きたヒグマに接する直接観察の実現、もう一つには頭骨・胃袋・糞などから定量的なデータを得ること、この二点がとり組むべき当面のテーマであるということで一致をみた。そのどれもが個人ワークとしては自づから限界の生ずるところであり、チームワークと若さとよき協力者が必要とする仕事であるには違いない。この一環として、七月四日から七月十三日までの予備調査、七月二十六日から八月八日までの本調査を、大雪山系において実施した。以下、その結果と問題点をつづることも無意味ではなからうと考え、一端を紹介することにしたい。

大雪山系を調査地に選んだのは、生きたヒグマを遠方から気づかれずに観察できる

だけの立地でなければならず、大雪山系においてないと考えたからにはかならない。

実際、予備調査に際して、高根ヶ原・五色ヶ原がこの条件を満たしていることで、実現の可能性があると自信を深め、本調査に臨んだ。大雪山高原温泉から大雪山入りして、白雲岳石室にベースを構えた。当初の計画では五色ヶ原にベースをおくことにしていたが、日程・人員の関係で高根ヶ原に変更した。先発隊は前田喜四雄隊長以下、七名。上川営林署の技官であり、これまで数多くのヒグマを仕止めてきた福士啓吉さんが、調査期間中の四日間行動をともにしてくれた。これまで何かにつけ協力を惜しまれなかった福士さんが、愛用のライフルをかついで参加してくれたことは、どんなに心強いものであったか。われわれはよき理解者をまず得たことになる。

調査は二つの方法を併行して行なうことにした。まずメインワークが直接観察である以上、見通しの利く定点観察点を設定して、夜明けから日没にいたる観察可能な時間帯は、交代で終日観察に当ることにした。福士さんの話や实地踏査の結果から、小白雲岳山頂が最適であろうと決定をみた。午前四時～午前九時、午前九時～午後二時、午後二時～午後七時の三つの時間帯に分け、二人一組を原則として、一人は

南・東側、もう一人が北・西側の観察に当たった。一方、これとは別に二人以上のメンバーからなる移動観察班を編成した。名称からうかがえるとおおり、各地に向向いて糞の採集、食痕・足跡など痕跡の記録および聞き込みを主な任務とした。踏査したのは南は忠別岳、北は黒岳にいたる区域で、目ぼしい場所は大方調査したことになる。

主として移動観察班によってもたらされた糞六十個のほか、足跡・食痕の記録の分析が済んでいない現状ではにわかに結論は下せないが、糞や食痕の分布にかなりの偏りがあることが認められることから、なんらかの意義づけが可能かも知れない。たとえば食痕（この場合は、高山植物の根を食べるために掘った掘り跡のこと）は一つの沢についてみると、上流に行くに従って新しい掘り跡が多くなる傾向が見られる。これは上流に行くほど雪溶けが遅くまで残っていることなどから、植物の生育もそれだけ遅れるため、じゅうぶんに生育した下流の植物から順に食べはじめたことを暗示しているよう。

糞については分布が一部地域に集中する傾向がうかがえ、その多くがツガザタラの上にたらしめてあったのが印象的というほかはない。ツガザタラの上に好んで脱糞するだけの特別な理由があるのだろうか。それとも他の場所は、草丈が高いことなどから

発見しづらいことによるのか、興味のあるところでもある。はつきりしていることは、尾根の部分ではきわめて少ないということである。

また掘り跡の多い場所、つまり、採食場所と覚しき地域に必ずといってよいほど糞があるのもおもしろい。一口に糞といってもいろいろあるが、一般的形状は黒味がかかり、植物質が大部分を占めているせいか、新しいヤツは芳ばしい香り？さえる。古くなると有機質が溶脱されてしまらしく残っているのは大部分が繊維質で黒味に欠け、馬糞の乾いたのを思わせるものもある。大きさはそれこそ千差万別で、小は万年筆大から、大はバケツ一杯分はあると思われる糞まであった。古いものほど小さくなっているのは、雨で流されたりする欠損があるためであろうか。糞の「たらし方」にも様々なタイプがあつておもしろい。通常は直径三センチくらいの塊が、適当な長さに積みかさなっている見慣れたタイプだ。一塊ずつポトポト距離をおいてたらししてあるものもある。それが数十センチから一メートルくらいの間隔で数メートルにおよんでいるものもある。一方に太いのが鎮座して、次第に細くなっていくことから、どう移動したのか推測できるのも幾つか見られた。はたまた通常の糞の形はまったく認められず

に、草の上にベッタリ広がっているのもあつて、ヒグマでも下痢をするのかと思わず苦笑したものだ。

臭い話は尽きないがこれくらいにして、肝心の直接観察の結果を明らかにしよう。

ベースを置いた期間は十二日間、そのうち予定どおり定点観察を行なえたのは八月に入ってから僅かの五日間。午後から雲が昇って視界が遮られたり、ガスがかかったりして観察不能になった日もあつたから、正味は三日間程度に過ぎなかつたことになる。その間、定点から観察できたのは二回、それ以外の折りに二回観察しているから、はじめての直接観察の試みで四回というのは、悪天候に災いされたことを考へ併わせれば、どうにか成功した都類に入るだろう。

大学沼付近で七月三十一日(曇)、前田隊長が見たのが最初の記録。これは沢の上になつて何気なく下を見たら、八メートルほどの所に背面金毛の三オグマがいたというもので、突然のこと故それ以上克明に観察する余裕はなかつた。半時間ほどして四名のメンバーが現場を見ようと下つた際、近くに潜んでいたヒグマがハイマツをかきわけて逃げて行ったことから、ハイマツやササの中に逃げ込むと、そのままじつとしてることが多い、という猟師の話が正しい

ことが証明されたことになる。また別にいう、ハイマツの中を音もなく逃げおおせるという俗説は、どうやら怪しいことも身をもって知れたのは貴重であつた。

二回目は八月二日(晴)午後一時半頃、定点で筆者が西側の雪溪を小走り下るヒグマを見たもの。この場合はとっさのことで、双眼鏡で動きを追うのが精一杯で、大きき・色には自信が持てない。最後はハイマツの中に姿を没した。

三回目は木下隊員と筆者が八月三日(晴)一時半頃、およそ忠別岳山頂から見下せる南側の沼で、水浴中のヒグマを観察した。直線距離にして三百メートル程度だったから、肉眼でも頭から両肩にかけて金毛であることがはっきり識別できた。水浴びそのものは、動物園のホッキョクグマがよく見せる泳ぎ方を思わせた。首から上だけ水面から出して、気持ちよさそうに水浴していた。興味深かつたことは沼からはい上つた際、犬がよくやる「ブルブル行動」はやらなかつたこと。上陸後は首を左右にゆくり揺さぶり、何物にも應ぜず大地をのし歩

くという感じがした。体もしまつており、貫録じゅうぶん。見るからに山の王者たる風格を備えていた。それに大きかつたこと——二メートルは優に越していたと思われ。十数分間の観察に過ぎなかつたが、その間、採食はせず身の丈二メートルくらい

のササの中に身を没した。なお、前日の八月二日二時半頃、忠別岳北側の沢で北大山岳部のパーティーが、六十メートルの距離で大きなヒグマと遭遇している。首の回りのみ金毛だったという。

そして四回目は三回目と日時ともに同じ頃、定点で阿部・新妻両隊員が大きなヒグマを約二十分観察した。筆者が前日見た場所と近いいうえ、出現時間までほぼ一致している点に興味をひいた。このヒグマも採食することもなく、最後にはやはりハイマツに潜行している。二日つづけて同一地点・同一時刻に現れたことから、同一個体ではないかと考へるのはもつともなことだが、それを確定するだけのデータはない。

以上、四回ばかりの直接観察の結果からヒグマの生態を帰納するには絶対数が足りない。したがって事実の認識に留まる程度と考へるべきであるが、幾つかの有益な問題点を提起している。その第一は、従来ヒグマを野外で直接観察する試みは、まったくいってよいほどなされてこなかつたが、じゅうぶん可能性が持てる見通しがついた。その際、風向きをじゅうぶん考へる必要があるのは、いうまでもない。また日差しの厳しい日中に水浴びすることは、今回の例から知れるとおりにじゅうぶんあり

得ることから適当な沼を重点的に調べてみることが、直接観察の機会を増すことにもつながってくる。

第二には、直接観察をした四回とも、北大山岳部の目撃記録を入れれば五回全部が、一時・二時台に集中していることである。それも高根ヶ原の長さ五キロ、幅三キロ程度の範囲内に五頭も出現して、大きさ・毛の色・出没時間の重なり合いなどから検討して少なくとも四頭は別個体であると思われるのは、何を意味しているようか。しかも夜行性と従来いわれているヒグマが日中、しかも短期間のうちに五頭も出没しているのだから、われわれの目に触れないヒグマを考慮に入れば、実数はもっと多いことになる。そうするとヒグマの世界にも存在するといわれているテリトリー（縄張り）との関連は、どうなるのだろうか。また今回の直接観察のうち採食中のヒグマが見られなかったことは、やはり日中の活動は二義的なものかも知れないとも受けとれる。はなはだ興味深い問題の足がかりにはなつたわけで、今後の調査に負うところきわめて大きいものがある。ただし単なる観察に終わることなく、新たな方法を駆使していくことを怠ってはなるまい。

正直なところ、ヒグマ研にとって二週間におよぶ調査にくり出すことは、資金面で

かなりの無理があった。それだけに、自力で野外調査を行なうのは、今回が限度いっぱいのところであった。しかし、ヒグマという対象を考えるなら、各シーズンにわたって野外調査に赴むことがどうしても必要であることを考えると、改めてヒグマ研究の困難さが思い知らされる。今後は京大がツキノワグマに装着して成果を得たテレメーター（無線発信機）をヒグマにも試みてしかるべきかも知れないのだが、真剣になればなるだけ、ヒグマ研究の重みが双肩にかかってくる。その重みに耐えるだけの計画力と実行力が要求されるゆえんだ。

メンバー全員が各自の仕事のほかに、サブワークとしてヒグマに取り組んでいる現状は問題がないわけではない。特にチームワークの面では、すでにある種の壁にぶち当たっているのも事実だ。また外部との協力体制は悲観的といえる状況の中で、積極的に協力を申し出てくれる個人・団体が現われはじめたことは、朗報となっている。即座の成果が見込まれない研究の中でも、われわれがやるうとしていく分野では、こうした民間の協力が最大の支えになっている。現実には喜ぶべきか、悲しむべきか。

§

大雪山系にあって七月下旬に起きた日高での事件はショックであったし、改めてヒ

グマと人間の関係を考えずにはおれない出来事であった。北海道では明治以来、多くの人々がヒグマに傷つき倒れてきている。「ヒグマ三大事件」と呼ばれる事件はその極に位置する惨事で、その脅威は道民の無意識下に深く根ざしているに相違あるまい。それにしても今回の事件は異常だ。夏の山のヒグマに肉食わす登山者は沢山あって、ほとんど人を襲わないとされている。

ヒグマか人間の側かいずれかがよっぽど常軌を逸していたとしか考えられない。餌不足・手負い・疾病などが異常な行動に走らせることは考えられるが、今回の場合、前者の可能性はきわめて薄いとされている。疾病については、たとえば脳に異常をきたす病気がかかっていることがあっても、それを証明する研究体制はない（技術的にはまったく問題はない）。

こういった状態では、人間の側がひたすら注意するほかはない。山中を歩く際は、鈴や笛を鳴らして人間の存在を先に知らせ、出会い頭にバッタリ会わないようにすることが、旧態依然としていながらも、すべてであるといってもよいだろう。積極的に人間を襲うヒグマは、ほとんどないといわれているのだから、人間が風下にある時は特に注意が肝心だ。

ヒグマは「猛獣」であるがゆえに絶やさ

なければならぬというが、そのとおりだろうか。むしろ人間が「絶滅」を金科玉条にヒグマに挑むその形相が、ヒグマに反映しやしまいかと恐れる。ヒグマはむしろ臆病といったほうがふさわしいくらい慎重だ、ということとヒグマに詳しい人はいう。だが、ヒグマに対する人間の恐怖心は想像以上に大きい。ヒグマがおよぼす有形無形の被害は大きいには違いないが、それとネズミの被害にくらべたら、遙かに小さいはずである。人間がヒグマに対して抱く恐れは、太古の時代より培われた「人間を襲いうる」動物、とくに大型動物に対する本能的とも思える恐怖心に根ざしているのかも知れない。文明から一歩遠のいた山や森にあるとき、祖先から受け継いだ本能が甦ってくるのだろうか。大自然に立ち返った際の、人間の地位を如実に示しているようでもある。

しかし、はつきりいえることは、恐怖心からは正しい解決は生まれてこないということだ。人間とヒグマの「関係」の解明が急がれるべきだ。その努力の積み上げなくしては、ヒグマによる有形無形の「被害」は甘んじなければなるまい。それにしてもヒグマには余りに未知の分野が多過ぎる。

（北大ヒグマ研究グループ）

農学部応用動物学教室大学院生